様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２０９０

研究課題名（和文）敦煌本経巻と正倉院本経巻とに基づく漢字字体史の基礎的研究

研究課題名（英文）A fundamental research for history of the Hanzi glyph in Dunhuang sutra manuscripts and Shosoin sutra manuscripts

研究代表者
石塚　晴通（ISHIZUKA, Harumichi）

北海道大学・-・名誉教授

研究者番号：１００００２２８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　漢字字体史研究の基礎資料とするために、敦煌本中国南北朝・隋・初唐経巻及び正倉院本隋・初唐・日本奈良朝経巻の本文をデータベース化し、漢字字体とその揺れを実証的に示し、『干禄字書』等の字書と比較可能な資料を作成した。
　楷書字体の形成定着期にあたる中国南北朝・隋・初唐経巻は敦煌本と正倉院本とに多数存し、それらに基づく日本写経も正倉院に存し、近時これらの原本画像が公開・出版され、有益な研究資料となっているが、文字列の検索に不便があり、字書との比較も困難度が高い。本研究では、本文データベース構築により所用の漢字字体検索と字書記述との比較の基礎資料を作成した。

研究成果の概要（英文）：The authors have made the database of the Hanzi glyph in Dunhuang sutra manuscripts and Shosoin sutra manuscripts for a fundamental research for history of the Hanzi glyph. Recently it has published many useful facsimiles and CD/DVD of those manuscripts, but it is rather difficult to refer them for the glyph. From this work, it is possible to see the variants of glyphs in those manuscripts and to compare them with descriptions of a glossary “Ganluzishu干禄字書”etc. The result has been shown into the “Hanzi Normative Glyph Database (HNG)” (http: //www.joao-roiz.jp/HNG/).
From this work, the standards of each Hanci glyph have been shown in early Tang Chinese manuscripts and also in Nara Japanese manuscripts. It is evident that Japanese standards of each Hanzi glyph have been settled after the Chinese early Tang standards in 8th century. From this database it is evident that the standard of Hanzi glyph has changed in periods and regions.

研究分野：日本語学、敦煌学

キーワード：漢字字体　敦煌本　正倉院本　初唐標準　開成標準

１．研究開始当初の背景

2004 年より公開の漢字字体規範データベース（Hanzi Normative Glyphs database、略称 HNG、代表者：石塚晴通）によって、楷書の漢字字体の基準は決して汎時代的なものではなく、時代・地域により相違があり変遷することを具体的に知ることが出来るようになった。中国南北朝・隋は楷書の字体の形成期で、まだ字体に揺れのある時期であったが、初唐に至っていったん基準が明確化し、晩唐の開成石経（837 年）で基準が大きく転換し、正・俗・通・訛の基準が明確化するという字体変遷モデルを示した。

一方、西原一幸氏の研究によって、隋から唐にかけて『正名要録』（郎知本）、『群書新定字様』（杜延業）、『干禄字書』（顔元孫）等、字形・字音の類似により過誤に陥りやすい文字の弁別を目的とする字様書が撰述されたこと、それらにより正・俗・通・訛の基準が形成される道筋が示された。前者は帰納法、後者は演繹法による研究であったが、現在は、両者を統合・発展させる研究手法が待たれる段階である。また、前者 HNG は標準文献を厳密に選択するため、南北朝写本 4 点、隋写本 3 点、初唐写本 4 点、奈良朝写本 5 点にとどまるが、敦煌本・正倉院聖語蔵本にはこれらに数倍・数十倍する写本があり、詳細な検討が待たれていた。

２．研究の目的

漢字字体史研究の基礎資料とするため、中国南北朝・隋・初唐および日本奈良朝の経巻の本文をデータベース化し、この時期の字体とその揺れを実証的に記述し、『干禄字書』等の字様書と比較するための基礎資料とする。楷書字体の形成期にあたる中国南北朝・隋・初唐の漢文写本は敦煌本と正倉院聖語蔵本に多数存し、それらに基づく日本写本も正倉院聖語蔵（天平十二年御願経等）に存する。これら日中の古経巻は原本画像が公開・出版され、有益な研究資料となっているが、文字列の検索に不便があり、字様書との比較も困難度が高い。本研究では、経巻の本文データベース構築によりその改善を図って、所用の漢字字体を記述し、各種字様書との比較の基礎資料とする。

３．研究の方法

敦煌本と正倉院聖語蔵本の年紀・料紙・書体等の書誌的特徴から書写年代が明確な経巻を選択しその本文データベースを構築する。敦煌本（スタイン本・ペリオ本）からは南北朝写本、隋写本、初唐写本を適宜選択する。特に初唐の長安宮廷写経 20 点は最重要資料なのですべてを対象とする。正倉院聖語蔵本は、隋経と唐経を中心にして、天平十二年御願経と神護景雲二年御願経をも加えて、選択する。

本文データベースには、本文の文字情報に加えて、原本の紙数・行数、複製本・公開画像の所在を付加して、文字列を検索して容易に本文画像を参照できる検索システムを構築し、南北朝・隋・初唐および奈良朝の経巻に用いられた漢字字体を総合的に記述して、各種字様書（『干禄字書』、『龍龕手鏡』等）との比較のための基礎資料を作成する。

４．研究成果

南北朝・隋・初唐の経巻に見える漢字字体は、飛鳥時代および奈良時代の漢字使用の母体となったものである。特に南北朝・隋の写本には後の楷書字体と異なる古体・異体が多く、その残存を日本写本に指摘することは大きな成果である。

敦煌本・正倉院本が貴重な研究資料であるのは言うまでもないが、文字列検索の不便の解消も大きな意義がある。これらは中国俗語を含み、作成したデータベースは漢文訓読史・漢語史研究に活用可能であり、本研究は敦煌本と正倉院本を利用した言語史研究の創成を促す契機となる。

本研究による新しい観点としては、楷書の形成期である中国南北朝・隋・初唐の字体を敦煌本と正倉院聖語蔵本によって記述する点、これによって日本古写本に中国南北朝・隋・初唐の経巻に所用の古体の漢字を具体的に指摘する点、中国南北朝・隋・初唐の経巻に所用の古体の字体と字様書の記述とを結び付ける点、この 3 点である。以下に具体的成果を箇条書きしよう。

(1) 敦煌本について、南北朝写本、隋経写本、初唐写本の本文テキストデータベースを作成した。特に長安宮廷写経 20 点のテキストデータベースを作成し、更に、道教の宮廷写経である初唐写本の P.2444 及び P.3233 の洞淵神呪経（664 年）、およ

び私的写本であるP.2881法華経(670年)について、フランス国立図書館において原本調査を実施し、テキストデータベースに加えて、文字画像データベースも作成したのは大きな成果である。

(2) 正倉院聖語蔵の隋経・唐経・天平十二年御願経・神護景雲二年御願経について、敦煌本と比較すべきテキストの選定を行い、一部について本文テキストデータベースを構築した。

(3) 敦煌本・正倉院本経巻の本文データベースと本文画像とのリンクを構築・整備した。このシステムは、HTML文書においてPerlスクリプトを実行することで本文テキストと原文画像とを対照するもので、簡易なものであるが、十分な実用性を持つものである。また、画像ファイルから一文字ずつ切り出すための Perl スクリプト等の作成も行った。

(4) 字書・韻書・音義の字体規範の記述との対比するために、原本『玉篇』、『切韻』残巻（P.2011)、天治本『新撰字鏡』、観智院本『類聚名義抄』、図書寮本『類聚名義抄』のデータベースを整備した。

(5) 漢字字体資料の原本調査について、国内では京都国立博物館・東洋文庫・高山寺等所蔵の字体資料の原本調査を行うとともに、大英図書館所蔵の字様書スタイン本S.388の調査を実施し、字体比較資料の精度を高めた。

以上から得られた研究成果について、論文発表と口頭発表を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 石塚晴通、池田証壽、高田智和、岡墻裕剛、斎木正直、漢字字体数据庫（HNG）活用¬漢字字体與文献的性格¬、日本学・敦煌学続編、1巻、2013、査読無、pp.72-87
② 池田証壽、宋版辞書在院政、鎌倉時代寺院社会的流通及影響、日本学・敦煌学続編、1巻、2013、査読無、pp.257-269
③ 石塚晴通、漢字字体規範史から見た『龍龕手鏡』、口訣研究30、2012、査読有、pp.5-21
④ 池田証壽、漢字字体の実用例と字書記述から見た『龍龕手鏡』、口訣研究30、2012、査読有 pp.23-52

〔学会発表〕（計５件）

① 石塚晴通、日本人は「漢字」をどのように使いこなしてきたのか、北海道漢字同好会講演、2014年12月6日、札幌かでる27（札幌市）
② 池田証壽、漢字字体史の資料と方法—初唐の宮廷写経と日本の古辞書—、第111回訓点語学会研究発表会、2014年11月2日、東京大学（東京都文京区）
③ 石塚晴通・唐イ、開成石経與版経 ―漢字字体規範数据庫（HNG）簡介―、佛教與中国宗教研究的新視野與新方法、2014年7月19日、復旦大学（中国）
④ 石塚晴通、漢字文献と非漢字文献、東洋文庫講習会「西洋書籍と東洋研究」（招待講演）、2013年9月30日、東洋文庫（東京都文京区）
⑤ 池田証壽、平安時代漢字字書総合データベースの構築、第108回訓点語学会研究発表会、2013年5月26日、京都大学（京都市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
漢字字体規範史データベース
http://joao-roiz.jp/HNG/

６．研究組織
(1)研究代表者
石塚　晴通（ISHIZUKA, Harumichi）
北海道大学・名誉教授
研究者番号：１０００２２８９

(2)研究分担者
池田　証壽（IKEDA, Shoju）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１７６０９３

(3)連携研究者

小助川　貞次（KOSUKEGAWA, Teiji）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：２０２０１４８６

永崎　研宣（NAGASAKI, Kiyonori）
一般財団法人人文情報学研究所・研究員
研究者番号：３０３４３４２９